



G尺
白雲神

とりの
わ

53

一万体観音満願号

埼玉 名栗

昭和57年11月17日

宗教法人
白雲山

鳥居観音

表紙解説

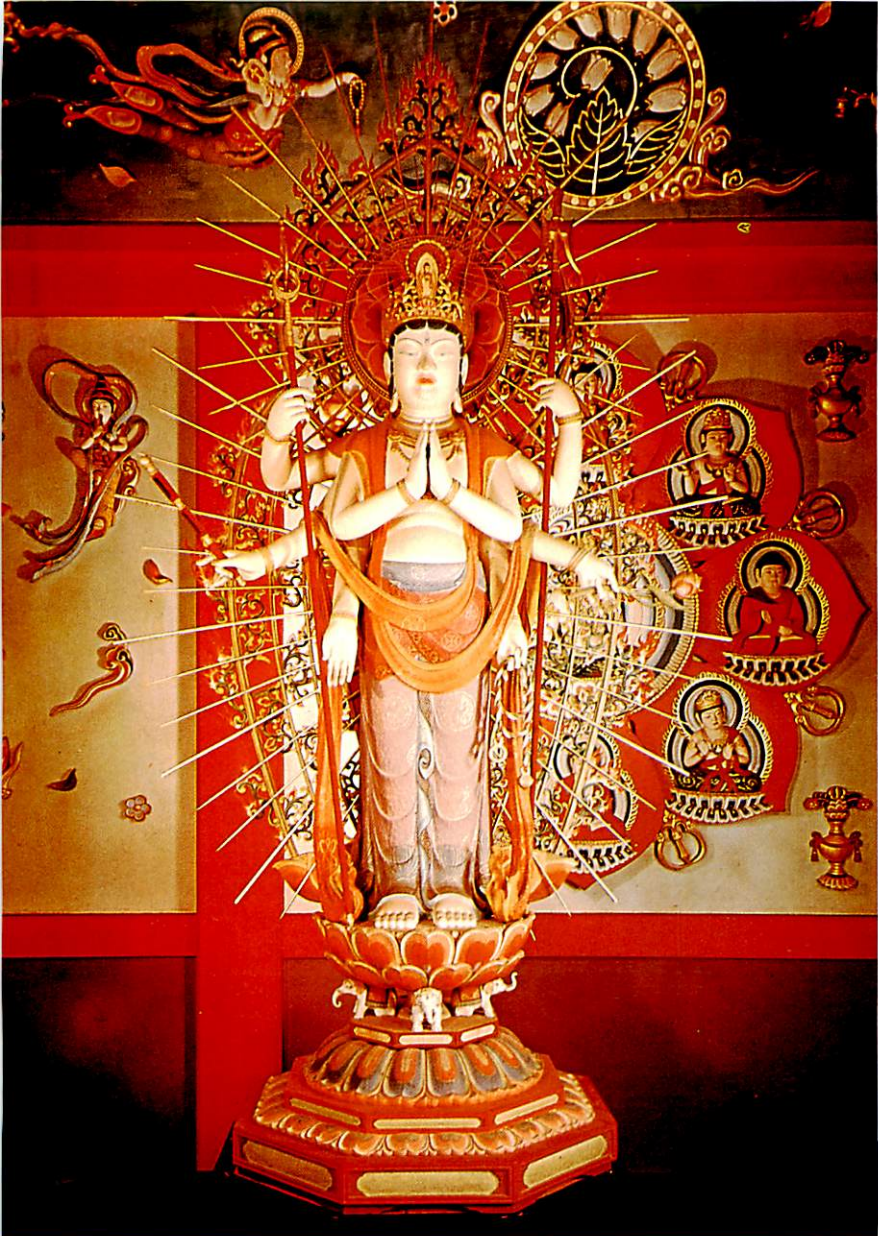
一万体観音

山頂の観音さまのお堂の中に祀つられる一万体観音。お施主さまの累代にのぼるご先祖のみ霊が、観音さまに抱かれて、のぼる香煙の中に安らいでおられます。

その白無垢のご尊像は、子孫の敬虔な祈りを表象するかのよう、尊とく清々しい。

最近ご遠方からの参拝も増え、緑の丘にまします白衣の大観音さまに、齊しく法悦と隨喜の念に打たれる趣きでございますが、特に一万体観音が大勢の施主によって、先祖供養のため祀つられているお志に深く共感される向があつて、好縁にあやかりたいとしてのお申し込みが続いています。

お蔭さまで本年その満願をお迎えすることになりました。ありがたいことでございます。



切り取ってご使用ください。

フクケンサクカンノン
不空絹索観音

口 絵 解 説

鳥居観音のご本堂に祀つられている七観音の内の一尊像で「不空ふくう霜しも索さく観音くわんおん」さまと申され
れます。

不空は心願空しからずの義で、霜は網、索は綱糸を意味し、生死の大海に妙法蓮華經の
餌をまき、煩惱に迷える人々を、もれなく救済して下さるといふ観音さまです。

鳥居観音開祖、平沼弥太郎先生作

聖観音、如意輪観音に次で、昭和三十二年祭祀
先祖の残された裏山の大捨での一本彫り。

絵高三、八五米

とりる 目 次 第53号

表紙	① 一万体観音	
表紙裏	② 表紙解説	
口 絵	③ 本堂に祭祀の「不空鞞索観音」	
口 絵裏	④ 口絵解説	
一万体観音の満願をお迎えして	鳥居観音 開祖	平沼彌太郎……………二
母親世音菩薩	鳥居観音	尾尻 天外……………四
道光禪師ご法話(其三十五)		……………六
禅のはなし(其三)	大本山総持寺 前副監院	佐藤 俊明……………十
西遊記(其四十六)		……………十四
一万体観音奉安者報告		……………二十
写経奉納者報告		……………二十一
鳥居観音だより		……………二十二
裏表紙裏	寺域案内図	
裏表紙	これからの行事	



一万体観音満願を

お迎えして

鳥居観音

開祖

鳥居 観音

この度一万体観音の満願をお迎えすることが出来まして
こんなありがたいことはございません。

偏えに観音さまのお加護と、大方皆さんから寄せられた
ご善根の賜ものと存じ、心から厚く御礼申し上げる次第で
ございます。

お蔭さまで開創以来四十年を越え、観音さまの霊場として
大勢さまのご参拝をいただけるようになりまして、往時
を省みまして、まことに感慨無量のものがございます。

もともとこの鳥居観音を創ることに、私には二つの、
悲願がございました。

その一つは母の遺言で観音さまを、このお山にお祀りする
ことでございましたが、又お祀りした観音さまとの間に



巾広い縁結びの仲立ちをしたいというのが第二の宿願でございました。

拜んで心から安らいでいただける仏さまを作ろう。

お山をきれいにして参拝者にも楽しんでいただく。

行楽にお出かけの方にも、知らず知らずのうちに、心の浄化が願えれば……出来れば直接観音さまとの間に、ご縁を結んでいただく……と考えたのが一万余体観音の奉安で第二の宿願でございました。

無心で刻んだ何十年。鉦、鎌で植樹した三十年、私は今年九十一歳になりますが、楽しみな月々の参拝のたびに仏さまのお加護の忝けなさを思い、仏前に額くことでございます。又太くなった花木にふれて一入の感懐にひたることでもございますが、こうして私の悲願が達せられることになりまして、発願者としこれに過ぐる歎びはございません。

この上は観音さまのご霊徳のもと、皆さんの篤いご信心によって、一層法筵の深まっていますことを念ずるものでございます。

合掌

母 觀 世 音 菩 薩

鳥居觀音

尾 尻 天 外

觀音さまは阿弥陀さまのもとで、慈悲の門を司どられ、そのおん名の通り広い世の中で苦惱に泣き、救いを求める人の声に應じて、直ちにその苦しみを救って下さるといふ、ありがたい仏さまで、多くさんの仏さまの中でも、一番お優しいお姿をされておられます。

又慈悲深いそのお心ろから、求めに應じ、時、処に随って三十三にも身姿を変えられて、お出ましになられたとお経文にお示しがございますが、人間のお姿ばかりでなく、この世のものは凡て仏さまの化身だとのお教えもございます。

鳥居觀音の山頂の大觀音が落慶した時、ご導師が願われた大本山総持寺の岩本禪師さまも、この事を次のように香語されました。

「山は現ず他仏に非ず、仏、姿を変じて来るなり……」と、松の翠も風の音も、天地自然の大真理を具現し摂理を示していることであるから、仏に他ならないとの仰せでございます。

私共人間の世界に於ては、世の母親を觀音さまに譬えてお教え下さっておられます。

成る程女性は優しいし、子を育てる母親の献身的な姿は、この世の仏であるかも知れません。

膝に抱かれて無心に乳を飲む嬰兒。

父に叱かれて、母の膝元に救いを求める幼児。

外から家に戻って、「只今ッ!!」と云って母親の返事を待つ子供達。

大人になれば仕事に追われ、業務に疲れ、経営に苦んでノイローゼに陥る例は多いが、屋台の焼き鳥ではそのストレスは解消出来ないで、わが家に帰って始めて奥さんの優しい出迎えで、心の憩が

受けられる。

戦場の兵士は「万歳」を叫んで戦死したと聞いて来ましたが、私は永い間の戦場で一度もその声を聞いたことがなく、却って「国のみ桶となるぞ尊し……」と自からの誇りにこそ思える程に訓練された筈の幹部が、私の眼の前で斃られた時「おふくろ……」と一声残しての戦死でありました。

私は頬をこわばらして立ちすくんだことでありましたが、即死とも思えるその際で、どうして「おふくろ」と呼べるのでありましょう。

教えられるでもなく……血肉に享けた母の神秘!! 尊さ!! とつくづく感じたことでありました。

平沼先生の刻まれた観音さまの中でも「准胝観音」さまは、女性のお姿をされてのお出ましたとされていますが、そのお像を刻まれた時は、何時も亡くなられた母が出てこられて、見守られたといわれ、出来上ったそのお顔の相には、母の幻影があらわれていると申されます。

鳥居観音開創四十年を越え、発願者平沼先生の結

願は見事に実っておりますが、この残された偉大な業績は「み仏の加護と亡き母の恩愛によってこそ」……とおっしゃられるのであります。

あゝ母は尊し

若し子の遠くゆくあらば	帰りにその面みるまでは
出でも入りても子を憶い	寝ても覚めても子を念ず
己れ生あるそのうちは	子の身に代らんこと思い
己れ死にゆくその後は	子の身を守らんこと願う
あゝありがたき母の恩	子は如何にして酬ゆべき
母死に給ふそのきわに	泣きて念ずる声あらば
生きませる時慰めの	言葉交はしてはほえめよ
母息絶ゆるそのきわに	泣きておろがむ手のあらば
生きませる時肩にあて	まごころこめて採みまつれ

あゝありがたき母の恩

まごころこめて酬ゆべし

合掌



道光禪師ご法話 (故高階瓏仙貌下)

禪と簡易生活 (其三五)

一、一粒米作麼ツモの価ぞ

釈尊の定められた真の出家の生活というのは、仏弟子は、三衣一鉢といって、お袈裟が三通りと、それに一の鉄鉢というものを持っています。今日は鉄鉢でなく木製になりましたが、これを応量器といいます。自分の分に應じて、適当にうけるのでこの名が出たものであります。禪門においては既に応量器といつてあるように、限りをもってせよと誠められているのであります。よってわが道に在る人はみな儉徳(つつましましやか)を守り、物をつつましくして

いくのが規矩になっています。それから一面に物を大事に思うことも、禪門では最も大切なこととされていきます。この受くるに限りをもってすることと、物を大切にすることが簡易生活に最も必要なこととあります。

むかし石霜禪師が瀉山禪師の会下(もと)にあつて、米頭(米をつかさどる役の名)の役をつとめられていられたことがありました。あるとき瀉山禪師が、石霜禪師の米を斗っているところへいつて「檀信の施主物放撤(はなち捨てる)すべからず」といいました。

一粒の米が口へ入るまでには七十二功といつて、七十二回も人の手を勞するというのであります。して見れば一粒米も粗末にすることはできません。

そこで石霜禪師は即座に「濫りに放撒せず」と答えられました。(すなわち一粒米も粗末にはしないということ)。ところがそこに米が一粒こぼれていたと見えて、瀧山禪師が俯してこれを拾い「そういうがここに一粒落ちてゐるではないか。これでも放撒しないというか」といいます。

そのときに、瀧山禪師曰く「この一粒を軽んずることなかれ。百千万粒もこの一粒より生ず」といいました。そこで石禅いわく「百千万粒はこの一粒より生ずることは解ったが、この一粒はいずれのところより生ずるか」と問うと、瀧山禪師は呵々大笑して終ったが、明日陞座のとき「大衆 米裏に虫あり」といわれたと申すことであります。

坐禪の第一歩は、小事にも綿密の注意を払い、油断をしないということであります。世の諺にも「千里の道も一歩よりはじまる」といっておりますように、一歩のところから千里の道理があります。利根川の河の水でも、次第にその源を探って行けば、葎(つる草の一種)の露一滴一滴であり、この一滴

が、たくさん集まって利根川のような大河ともなるのであります。富士山のような高い山でも、わずかに一塵の土が集まってできたものであります。ゆえに小さいものだからといって、かりそめに思つてはならないのであります。

二、簡易生活と儉

諺に「一木一草、至理をふくむ」

ということばがありますが、この世の中にあるものは、如何なるものでもそれぞれに真理をふくんで存在するものであります。一粒の米でも、一つの石でも、一片の紙きれでも、みなこれ生命の現われであるかと心得て、決して粗略にしてはなりません。報恩報徳の觀念に住して、取扱つていくようにしなければなりません。古語に「茶裡飯裡、別所に向わず」ともあつて、仏法の眼から見るならば喫茶、喫飯も、行住坐臥も、柳の緑も、花の紅も、みな仏法の現われであります。ですからまた仏法は、露柱灯籠であるとも、牆壁瓦礫みな仏事をなす。とも申して

あります。ゆえに一微塵にも、仏の生命がこもっており、仏光明の現成であると知れば、たとえ繩きれ一本でも、ちり紙一枚でも、決して粗末にすることができません。報恩感謝の念をもって、大切にとりあつかっていかねばなりません。この感謝の心が実生活に現われて、やがて日用が仏法になるのであります。

仏教では四恩を説きますが、この四恩の帰するところは、感謝報恩の生活を説示したものであります。四恩とは申すまでもなく父母の恩、国王の恩、衆生の恩、三宝恩で、この四恩に深く徹すれば、一茎の蔬菜でも、一滴の水でも、決して粗末にはできないのであります。されば、前に申した瀉山の靈祐禪師は「この一粒を軽んずることなかれ、百千万粒もことごとくこの一粒より生ず」と仰せられた。道元禪師は永平清規のなかに「およそ食するところあらば、ただちに、すべからく一粒を費さざるの道理を法観、応観すべし。すなわち法等、食等の消息なり」と示されておりますのも、感謝のかぎりなきこ

とを申されたのであります。杓に半杓の水を残して、愛惜されたということは、有名な訓話となつていますが、彼の永平寺の山のなかでは、昼夜不足なく水は流れている。それでいて三杯の水を使うところは、二杯半にして、あとの半杓はもとの流れにおもどしになった。これは水の恩を思って、愛惜されたのであります。それで今日の永平寺の末寺には、水の不足を感じる寺院は少ないというのであります。また真宗の一如上人は、本堂に落ちていた紙くずを拾いあげて、「ああ、仏さまの御物よ」といわれて押しただかれたとのことであります。また洞山大師は洞山という山奥にいられましたが、ある日、谷川で大根を洗っておられると、あやまつて一葉を谷川へ流された。それを大師は十七八ちょうも、流れにそって追いかけられたのであります。このように過去の高僧たちが物を尊重され、自己の眼睛のようにされたのは、みな感謝報徳の観念であります。

三、禪の三心を体せよ

お互いに簡易な生活を送らねばなりません、またものを粗末にしてはいけないということは、よく解つても、これを実行することは容易ではありません。道林禪師が白楽天をいましめて、三歳の童児これを知るといへども、八十の老翁も実行することは困難である、といわれました。

実行は容易でないのです。しかしこの容易でないことを実行するのが禪で、これを実行するために、修業するのであります。ですから禪の修行は理窟をおぼえることでもなければ、変った行ないをするところでもありません。日々の生活において、不平不満なく、いかなる貧乏の逆境に立とうが、いかなる不幸に遭遇しようが、いかなる大事にぶちあたろうが、それに動揺しないよう平常時に、決定していくことが禪の修行であります。

神月禪師も述べていられるように、禪門の作務（作業、労役）は師家も雲水も差別なく、一会の叢

林（僧が集まって修行しているところ）のなかで、安居（定住して静かに修行するのをいう）するものは、みな従事することになっていきます。作務とは働くことです。努力せずに良田を得ようとしたり、勞せずして利益を得ようとするから、自らをあざむき、他をおとし入れたりしなければならぬことになるのであります。いわゆる百丈禪師の「一日作さざれば、一日食わず」といわれたおことばに、真に徹するものには、絶対に、不景気などとて恐れることはありません。

曹洞宗開山のお示しに、三心ということがあります。喜心、老心、大心の三つであります。喜心とは受けがたき人間に生を受け、しかも仏法によつて、安心を得ることのありがたさを喜ぶのであります。老心とは父母の子を思うがごとく、すべてに對して親切をつくすことであります。大心とは動かざること、泰山のような心に住することです。この三心を会得して、日常の上に活用していくのが真の生活であります。

禪のはなし

其 三

「極意」

大本山総持寺

前副監院 佐藤俊明

沢庵禪師といえば、沢庵漬けの創始者として、また、柳生但馬守宗矩の心の師として有名である。徳川三代将軍家光の帰依を受け、品川に東海寺を与えられ、江戸城に出仕した。

あるとき、朝鮮から珍らしい大きな虎が将軍家に献上された。虎といえば、加藤清正の虎退治、話に聞くその実物が見られるとあって、城中はたいへんなさわざだった。パンダが来た当時の人気を思えば

大体想像がつくというもの。将軍家光も大いによろこび、座所の近く、庭にオリをしつらえ、伺候する人あれば、まず虎を見せ、虎についての先取りの知識を披れきしては悦に入っていた。

虎見物が主目的であったかどうかは知らぬが、沢庵がお目通りねがうと、

「苦しくない、近う、近う」

と、例によって例のごとく虎談義に及んだが、話の勢いあまって、

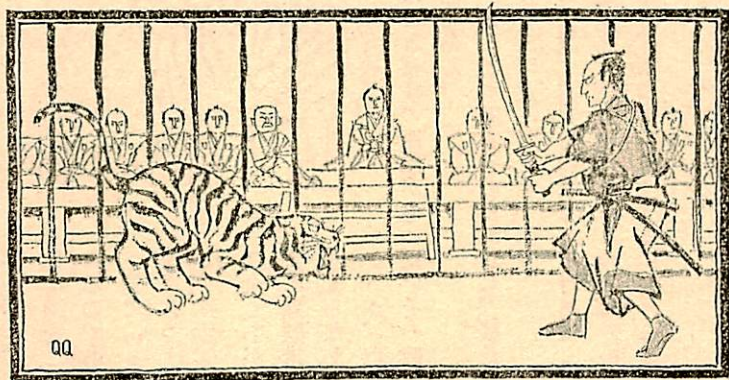
「但馬守を虎のオリに入れてみようか」

ということになり、宗矩が呼び出された。

柳生但馬守宗矩といえば、将軍家武芸指南番で、剣をとっては天下無双の達人。猛虎をおそれてオリにはいるのをしりごみしたとあっては醜名を万代にさらすこと必定。

「はッ、承知仕りました」

と答え、袴の股立ちをとり、オリの戸を開けさせて中に入り、刀をかまえてジリッ、ジリッと虎に迫った。虎は、ウォーッとうなり声をあげ、眼をいか



らし、爪をむき、いまにも飛びかからんものすごい形相。さすがは柳生宗矩、身に一分のスキもなく虎をにらみすえた。劍聖と猛虎のにらみ合いはしばし続いたかに感じられたが、それはホンの束の間で、虎は宗矩の威敵に屈し、攻撃の姿勢をくずして視線をそらした。勝負あり！ 宗矩、気を抜くことなく、静かに後退し、機を失せず、すばやくオリのそとに出た。

手に汗をにぎり、固唾を呑んだ將軍はじめ一同の面々、はじめてわれにかえり、万雷の拍手を送った。

満悦の三代將軍家光、こんどは沢庵に向い、

「どうじゃ、和尚もやってみないか？」

「お望みとあれば！」

と、沢庵は気軽に答え、なんの身仕度も身がまきもなくオリにはいり、ノコノコ虎の前に進み出、犬や猫をかわいがると同じ仕草で虎の大きな頭をなではじめた。不思議なことに、虎は敵意を示すどころか、主人に愛撫される小猫のように目をほそめ、尻



矩の間にはこれだけの距離があった。その距離を示すこんな話もある。

或る日、宗矩が沢庵をその室に訪ね、談たまたま極意ということに及んだとき、沢庵は、

「極意は口で論ずべきものでなく、時処位に即して發揮されねば意味がない。ごらんのとおりいま雨が降っているが、雨の中にあつて体の濡れぬ極意はあるか？」

と問うた。

尾をふり、沢庵の体に頭をこすりつけるのであつた。

見ていた人々は、あつけにとられ、宗矩の場合とは全くちがった光景に感歎措くことを知らなかつたというが、沢庵と宗

「ございます」

「じゃ、見せてくれ」

「承知いたしました」

と、宗矩は、雨降る庭に出て、縦横無尽に雨を斬りまくって座に戻つた。なるほど、雨に降られたにしては濡れてない。が、全然濡れてないわけではなく、多少は雨の痕跡が袖のあたりに残っている。

「貴公の極意はその程度か？」

「はい。では禅の極意では全く濡れないというのですか？」

「いかにも」

「ぜひ拝見させていただきたいものでござる」

「よし」

沢庵はつと立上つて庭に降りてしばらく雨の中にたたずんだ。そして全身濡れねずみになって座に戻り、にこにこしながら言った。

「どうじゃ、わしの極意は？」

宗矩のいぶかる顔を見て、沢庵はきつい言葉で言つた。



「貴公のは濡れているから極意にならん。わしのは濡れてない！」

柳生宗矩は、濡れねずみになって極意の何たるかを教えようとする沢庵の老婆心をようやく会得することができた。

宗矩が、無我夢中で雨を斬りまくったのは、虎をにらみつけたのと同様、主客対立、まさに対決の姿勢である。だから相手を気にし、負けまい、犯されまいと常に相手に動かされる。沢庵の場合はそうではない。虎のときは、かれをわれに撰取し、雨のときはわれを対境に没入する。ともに主客融合。一真実の世界である。

沢庵が宗矩に与えた『不動智神妙録』には、いながらにして勝ち、無刀にして相手を制する不動智、劍禅の極意が説かれてある。



西遊記

(其の四六)

この物語りに出てくる主な人々



悟 空

高い山の上にある大きな石から生れたという猿で、玄奘法師のお供をして、災難に遭う度に、一飛び十万八千里の術や、七十二の変化術を使って大活躍する。



玄奘三蔵法師

中国の偉いお坊さんで玄奘三蔵法師という。天竺にお経をとりに行く長い旅に、悟空、八戒、沙悟浄の三人の供を連れ、魔ものや、妖怪と戦かいます。



沙 悟 浄

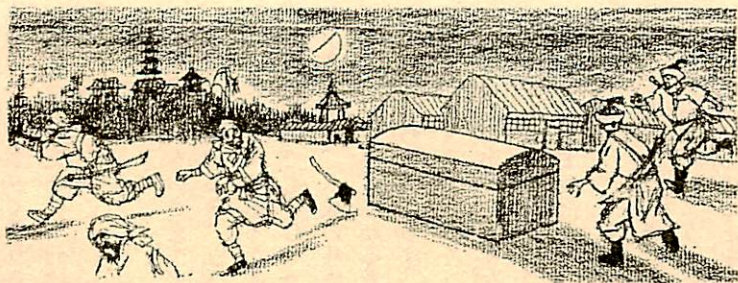
流沙川に住んで、人を喰っていた妖怪で、八戒と戦ったこともあるが、後で玄奘法師の弟子となり、悟空や八戒などと一緒に師匠さんを助けます。



八 戒

形は人間で、顔は猪の妖魔天上界から下界に落とされて、こんな姿になったという。玄奘法師から八戒の名をもらい、悟空達と一緒に活躍します。

「西遊記」は玄奘三蔵法師が、天竺(インド)から中国にお経文を持ち帰るまでの、十七年間の、苦難の物語りです。
法師のご霊骨が鳥居観音の三蔵塔に祀られていることに因んで、連載しております。



くりくり坊主

ながもちの中は、いきぐるしくて、ねむるところはありません。

「むしあついね。やりきれない。」

ずきんをとって、着物をぬいで悟空は、はだかになりました。からだをぼりぼりかきながら、でたらめなひとりごとをいじりました。

「商売はいいものだ。もとははずか五千両だったが、馬をうって三千両。もうけた金が、ふところには四千両あるから、みんなで一萬二千両だ。このふんどと、われわれが大金もちになるのもちかいうちだろ。」

ところが、旅館の番頭が、これをきいてしまいました。番頭といっても、ほんとうはわる者のなかまです。ずっとまえから、この宿屋にすみこんで、金や宝をねらっていたのです。

夜ふけになってから、番頭はなかまをよびいれて、ながもちをぬすみました。

ながもちが、がたがたゆれだしたので、八戒はびっくりしました。

「地震かな。ひどくゆれるよ。悟空のきょうだい、これはどうしたというわけだ。」と、八戒がいうのを、

「しっ。」

悟空は、口をおさえてだまらせました。

「八戒、しゃべるな。だまっているんだ。天竺までかついでいってくれるかもしれないぜ。そうなれば、歩かないでもすむじゃないか。」

小さな声で、八戒の耳にささやきました。

ところが、役人がわる者を見つけて、おいかけてきました。わる者たちは、ながもちをほうりだしてにげました。

「どこの品物か、しらべなければならぬ。」と役人は、ながもちを役所にはこびました。

「悟空よ、こまったことになった。」と、三蔵法師がいました。

「ながもちのふたをあけられると、わたしたちのあたまを見られてしまう。坊さんをころすという国王は、わたしたちのことを生かしてはおくまいな。」

「ころすといっても、そうはさせません。悟空は、そんなぼんやり者ではありません。なんとかします。」

悟空は、如意棒を、とがったきりにしました。それで、ながもちに穴をあけました。ありになって穴からはいだし、からだをゆすって、悟空のすがたにもどりました。

つぎに、毛をむしって、おおぜいの悟空をつくりました。もういちど毛をぬいてかみそりにして、さつきつくったおおぜいのにせ悟空に、一本ずつ持たせました。

「おまえたち、だれでもかまわないから、人を見つけてほしい、そのかみそりをつかって、おししようさまのような、坊主あたまのびかびかあたまにしてやれ。」

「へい。そうしてやります。」と、にせ悟空たちは、げんきなへんじをして、かみそりをかた手に、さつと町じゅうへちらばっていききました。

「ははは。おもしろくなるぞ。」と、悟空は、またな

がもちへはいって、ぐうぐうねむりました。

さて、あくる朝です。王さまのけらいのひとりか顔をあらっていると、そこへきたなかが、いきなり、

「あははは。これはおどろいた。あははは。」と、腹をかかえてわらいました。

「なにがおかしい。」

ふりかえって、あいてを見たそのけらいも、
「あははは。」と、大声をたててわらいました。

「なにがおかしい。くりくり坊主のくせに、人の顔を見てわらうとは、しつれいだぞ。」

「くりくり坊主は、そちらじゃないか。」

「なにっ。あたまがどうかしたのだから。」

ふたりは、いっしょにあたまをなでました。

「やっ、これは。」といったきりです。ふたりとも、つるつるのくりくり坊主だったので。

これは、小ざるたちが、けらいのねむったすきを見て、かみそりでそってしまったからです。

「たいへんです。あたまをやられました。」

けらいたちは、国王のへやへとびこんでいきました。ところが、おどろいたことに、国王のあたまも、けらいとおなじのつるつる坊主でした。国王もやっぱり、小ざるにやられたのです。

お城じゅうのものは、男も女も、みんなくりくり坊主にされていました。

「王さま、一晩のうちに、しかも、気のつかないうちに坊主にされるといふのは、ただごとではありません。いったいこれは、どういうわけでしょう。」

と、大臣があたまをなでいきました。

「わしも、それをかながえていたところだが……。あまり出家をいじめすぎたので、ほとけのいかりをかっただけはあるまいか。」と、国王もかながえこみながらいきました。

「ときに、あれはいかがいたしましたしょう。」と、大臣は、ながもちのことをいきました。

「わる者どものおいていったながもちの中で、なにか音がいたします。どうやら、人声のようにも思われますが、きみわるいことと、ございます。」

「ふうん。人声がするとはふしぎ。よし。わしの見ているまえで、ふたをあげて見るがよい。」

「はっ。かしこまりました。」

役人が四人がかりで、ながもちのふたの四すみをもち、ぱつとりのけた、そのときです。

「うおっ。」と八戒が、口をとがらして立ちあがりました。

つづいて悟浄、悟空、そのあとから法師が、しずかにすがたをあらわしました。

国王は、どことなくこうごうしい法師のすがたにおどろいて、

「あなたはどなたでしょう。ここへおいでのわけをお話してください。」と、ことばをていねいにしてききました。

「わたしは三蔵法師といます。経文をとりに、天竺へまいるとちゆうです。」

「それはそれは。すこしも知りませんが、おむかえにもでませんでした。ところで、なぜこのようなながもちの中に、おはいりでしたか。」

「そのわけは、わたしが話してやる。」

悟空が、ずいと、まえへでました。

「この国では、出家をころすというではないか。いままでも九千九百九十六人、われわれをころせば、ちようど一万人になるといううわさをきいた。だが、いのちはおしい。ころされてたまるものか。だから、ながもちへはいっていたわけだ。おかげでくるしい思いをしたぞ。あっちへこつん、こっちへこつん。こぶだらけになってしまったのは、だれのせいだと思う。」

あたまをさすって、悟空は、はらだたしそうにいました。

「出家をいじめるのは、ほとけさまにぶれいをするのとおなじことだ。かんべんならぬ。」と、ぎろりと、国王をにらみつけました。

国王は、からだをちぢめて、小さくなるばかりでした。

「出家にぶれいをしたのは、わたしのまちがいでした。ゆうべのうちに、城じゆうの者が、ひとりのこ

らずあたまをそられたのも、そのようなわたしのま
ちがいを、ほとけさまがこらしたものと気がつきま
した。これからは心をいれかえますから、いままで
のぶれいは、なにとぞおゆるしねがいます。」

「あっはっは。」

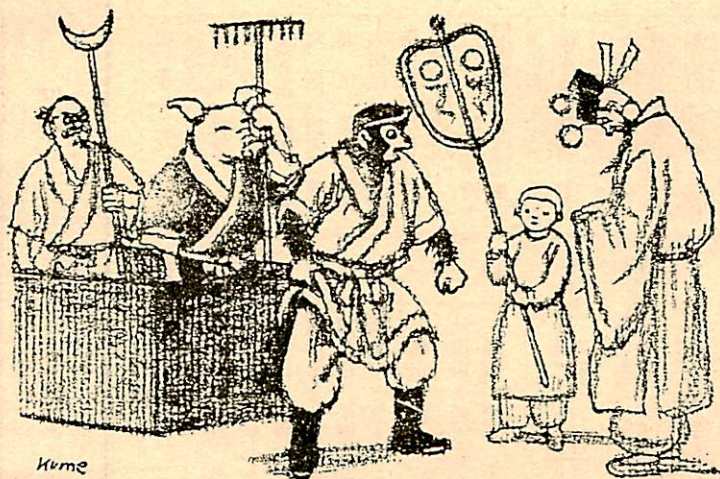
そばで、八戒が大口をあいてわらいました。

「わるいと思つたら、うんとごちそうをしてもらい
たいな。なにしろ、こちらは腹ぺこだ。ながもちに
は、なんにも料理がなかったからな。」

「これ。つまらぬことをいうものでない。」と、法
師は、八戒をしかったです。

その日から、滅法国は、欽法国と名をかえること
になりました。滅法国は、ほとけをほろぼす国とい
う意味があるので、ほとけをだいじにするという意
味の欽法国としたのです。三蔵法師が、国王にすす
めて、そうさせたのでした。

「よい名の国になりました。これからはよい国にな
ります。」と、王さまはよろこんでいました。



親 一万體
音 八

奉安者芳名

自五七・三
至五七・九末
敬称略

一	五	一	一	三	三	一	一	五	一	二	三	四	一	一	數	
川口市	新瀨市	毛呂山町	渋谷区	千葉市	横浜市	名栗村	昭島市	北九州市	豊島区	横浜市	相模原市	調布市	青梅市	青梅市	住所	
高松	吉田	木村	鷺見	津村	本郷	矢島	大内	福田	西嶋	長谷川	藤本	木村	輪千	浜野	芳名	
茂雄	きく	益己	千代	光枝	良三	武一	健夫	公江	達夫	松江	国夫	義雄	岩雄	誠一	満夫	
一	一	三	一	三	三	三	四	一	一	一	四	一	三	五	三	數
練馬区	広島県	世田谷区	飯能市	福岡市	板橋区	北九州市	柏市	練馬区	戸田市	秦野市	千代田区	調布市	銚子市	新瀨市	市川市	住所
畑	飯島	尾尻	吉島	横井	昼田	堂本	滝本	滝田	鳩貝	三奈木	荻原	大久保	新谷	益田	横田	芳名
タカ	艶子	津子	力良	道三	きみ	圭介	ます	トキ	恵美子	潔	寛子	賢一	さく	ふみ	正夫	
一	三	三	五	三	三	一	二	三	四	一	一	一	四	五	三	數
鳩山町	川崎市	田無市	川崎市	川口市	市川市	相模原市	ハワイ	渋谷区	渋谷区	大田区	北区	北区	東大和市	秋田市	横浜市	住所
関口	吉田	木崎	金子	島岡	山崎	青柳	朝田	広田	小林	先崎	鈴木	鈴木	脇田	菊地	新見	芳名
喜作	強	みつ	ゆき	増雄	重吉	友三	博子	進	その	善輝	時子	義昭	順司	清之助	よし	
																數
本表計 奉安者 一五六人 施主 一三八人 合計 二九四人		四	一	一	三	三	五	三	一	一	一	數				
		三鷹市	秋田市	青梅市	調布市	福岡市	横濱市	保谷市	武蔵野市	秩父市	秩父市	住所				
		松井	船木	柚木	宮本	松野	佐藤	小森	長柄	石原	儀助	芳名				
		吉雄	善太郎	敬子	みつ	和子	庄造	谷正雄	ちゑ子	ちゑ子	ちゑ子					

十一月十七日
満願到達予定

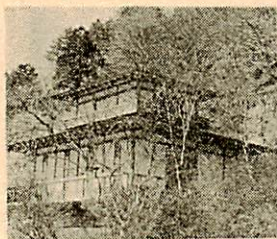
鳥居観音だより

三月



この月を迎えると、やっと春の息吹きを感じます
第三文庫の建立も、昨年暮れの地鎮祭から三ヶ月
たって、今月一応の完工となりました。後は周りの
庭作りと、内部の収納陳列にかかります。

平沼先生ご夫妻も常にご壮健で、ご参拝のかたわ
らこの工事に温かいご指示が続けられました。



第三文庫
銅葺木造二階建
62.5㎡ (19坪)
1階 46㎡ (14坪)
2階 16.5㎡ (5坪)

春季彼岸法要

中日の二十一日には、鳥居観音講中の先祖供養、
戦没者、戦災殉難死者の法要が行われ、併せて、家
内安全の祈禱が修された。

今月の一万体観音奉安（本誌二十頁参照）

北九州市、福田公江様ほか七名 十七体

四月



春季法要

四月十七日お天氣に恵まれて、朝からの参拝がつ
づき、満開のむらさきつつじのお山は、終日の賑わ
いでした。

ご本堂での法要の後、平沼先生のご挨拶があり、
大勢さまのご参拝を謝され、夢中で刻まれた往時が
偲ばれるとされ、大きくなった花木に触わって一入
の感懐に更けられると仰云られる。創業して四十年

を越え、今日ご自分の宿願が着々実っていることの
 喜びはたとえようもないが、偏えにみ仏のお加護
 と、ご信心深い江湖篤信者の協賛の賜ものによると
 されて、深い謝辞が述べられた。

平沼先生は昭和十五年、ご本尊をお祀りされた後
 も次ぎ次ぎに仏刻を続け、本堂やその他諸堂に祀つ
 てあるものの他文庫の中にも多くさんのものが陳列
 されています。特に仏像の表情に威厳と慈悲の相の
 出てこないことに苦しまれたといわれますが、先生
 の作の特徴はご面相の尊さ!!にあります。



龍頭観音
 (平沼先生作)
 木彫 70cm

今月の一万体観音奉安(本誌二十頁参照)
 新潟市、吉田きく様ほか六名 十五体



巖観音
 (平沼先生作)
 木彫 八〇cm

五月



この月はつつじ満開の真只中、四月末からの、飛
 び石連休も五月にはいってお天気に恵まれ、五日の
 子供の日など家族連れでいっぱいでした。
 練馬区小竹町老人会さま、上畑福寿講さま他観光
 バスの参拝の多い月であった。

今月の一万体観音奉安(本誌二十頁参照)
 新潟市、益田ふみ様ほか三名 十二体

六 月



日本火災海上保険株式会社 物故者慰霊法要

五年毎に行われる記念行事。このところ連日続いた雨もあがって、川崎社長さまはじめ百三十名さまのご参拝。鳥居観音の平沼先生も上山され、右近會長さまなどの久瀧を叙せられるなど小憩の後、ご本堂で慇懃な慰霊法要が営まれた。

センターでの諸行事を終えられ、全山を探勝されてのお帰りであった。



本堂での慰霊法要

本堂前での記念撮影



塔婆供養受付

七月お盆の卒塔婆供養の受付が始まり、庫裡は受付と塔婆書きでいっぱいになります。

今月の一万体観音奉安（本誌二十頁参照）

千代田区、荻原寛子様ほか九名 二十二体

今秋満願が迎えられるのにあやかりたいとされてのお申し込みが増えました。

夫々開眼して奉安がなされます。

七月



卒塔婆法要

七月十六日、送り盆の日の行事が、お蔭さまで、年々お申し込みが増え、ありがたいことでございます。この日山頂の大観音堂内に於て、大勢さまのご参拝をいただいて、誠に法要が営まれました。お塔婆は観音堂外の裾にたてられ、お施主さまのご先祖さまのおもりをしていただきます。

塔婆は仏のお心を表象したものであり、又私共のいつわりない真心をあらわしたものでございませう。昔し山の陥没で亡くなったと思われる人が、生き戻ったという不思議な話がありますが、塔婆の姿をされた坊さんに、毎日食事を、いただかれたいわれます。

今月の一万体観音奉安（本誌二十頁参照）

秋田市、菊地清之助様ほか五名 十七体



阿弥陀如来（平沼先生作
木彫〇・三m）

八月

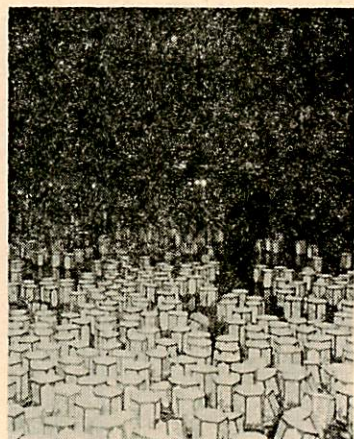


この夏は雨が続き、海山とも人の出が少なかつたようですが、晴れ間をみつけて名栗溪谷に涼を求め家族連れが見られました。

下のセンターの天然プールも子供達に人気があつて賑ふ声が聞こえて来ました。

流灯法要

年々盛んになる鳥居観音の流灯法要。ここ兩三年雨もなく、東京方面からの参拝者も数多く、大勢の



流 灯

お詣りをいただいて、敵かな法要ができました。
ご本堂での法要が終って、夕刻から名栗川で流灯
になりました。

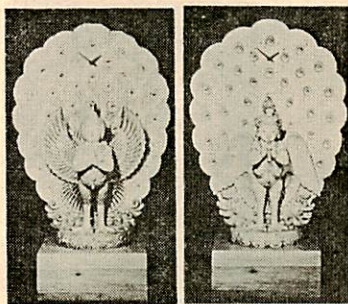
千数百の灯籠船、川一面に灯りの帯となって名残
りを惜しまれながらの、お帰りでしたが、その一隻
一隻にどれほどの先祖のみ霊が乗っておられたこと
でございましょう。仮に二十代を遡ってみますと、
百万人を超える尨大な数にのぼります。

その内のお一人でも欠けておられたら、今日私共

の存在はなかったことを思いますと、ほんとうに、
ありがたいことと感謝しないではおれません。その
感謝の法要がお盆供養であり、流灯は浄土にお帰り
いただく行事でございませう。

このような報恩法要に併せて、報われないもの、
(餓鬼など)に施しをするのをお施餓鬼と申します。

お盆に行う風習は、お釈迦さまの時代に、餓鬼道
におちている目蓮尊者の母を施餓鬼法要でお救いし
た日がお盆であったことに、ならったものでござい
ます。



迦 陵 頻 伽
(平沼先生作 2.3m)
(木彫)

今月の一万体観音奉安（本誌二十頁参照）
川崎市、金子ゆき様ほか十四名 三十三体

九 月



台風一過、雨にぬれた葉先に残るしづくが、ダイヤモンドのようにきらめく、澄みきった青空、爽やかな風。

秋九月は彼岸月になります。最も良い気候の季節太陽が真東から真西に沈む春分秋分の当日を中日として前後三日、計七日を彼岸会とよんで先祖の法要や、お墓参りをして感謝をしてきました。

「父母祖先への孝養に三種あり、衣食を施すを下品とし、意にたがわざるを中品となし、功德を回向するを上品となす」とのお示しがございます。

「敬老の日」がこの月に決められているのも同じような意味合でございましょう。

日本も今年、百才を越える長寿者が千二百人に達したといわれますが、一億二千万人の総人口からみ

ると、十万人に一人の割合でしかありません。百才生きるということは、まこと至難なことです。大事にして差し上げたいものでございます。

今月の一万体観音奉安（本誌二十頁参照）
横浜市、佐藤庄造様ほか七名 二十体



名栗村に伝わる獅子舞
（平沼先生作 木彫総高 0.3m）

○これからの行事

○十二月十日 大黒祭

平沼先生が刻まれた大黒さまは、四百数十に及ぶといわれますが、その最後にご本尊として彫られたものが、現在本堂の左脇にお祀りしてあります。商売繁昌、福德の神さまとして、親しまれます。

○十二月八日 釈尊成道会

お釈迦さまが、お悟りをひらかれた佳日です。

降誕会、涅槃会と共に、寺門の三大行事です。

○十二月三十一日 除夜の鐘

夜本堂でお経があがった後、十二時を境に、除夜の鐘が撞かれます。

谷を越え、里に流れる一〇八声、撞く人、聞く人……ともに迎える新年の幸を願うことです。

五十二年大鐘が建って以来、昭島方面、浦和方面からのお詣りがあり、初詣でに向かわれるご様子です。

○一月元旦 新年祈禱会 十時本堂で厳修。

年々ご祈禱の申し込みも増加し、着飾った参拝者

もみられ、川越の原田愛助様ご一行、飯能の平沼玉枝様ご家族、川越の斉藤恒作様ご一行、所沢の小山権之丞様など、毎年欠かせないお詣りで、お雑煮に賀詞交換などあつての下山です。

一般のご祈禱など随時お受しております。

(家内安全、商売繁昌、交通安全、病氣平癒、入学祈願、その他)

○二月三日 節分会(豆撒き)

お詣りの方々に、福豆を差し上げます。

○二月十五日 釈尊涅槃会

○三月二十一日 春彼岸法要

○四月一日より つつじまつり

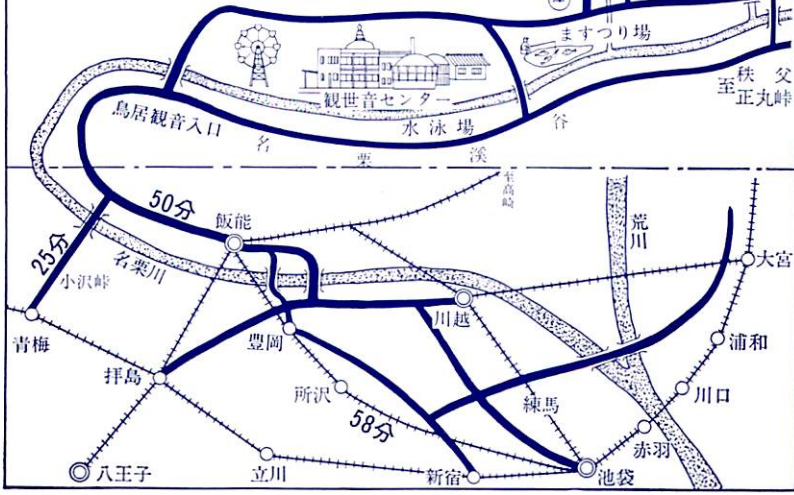
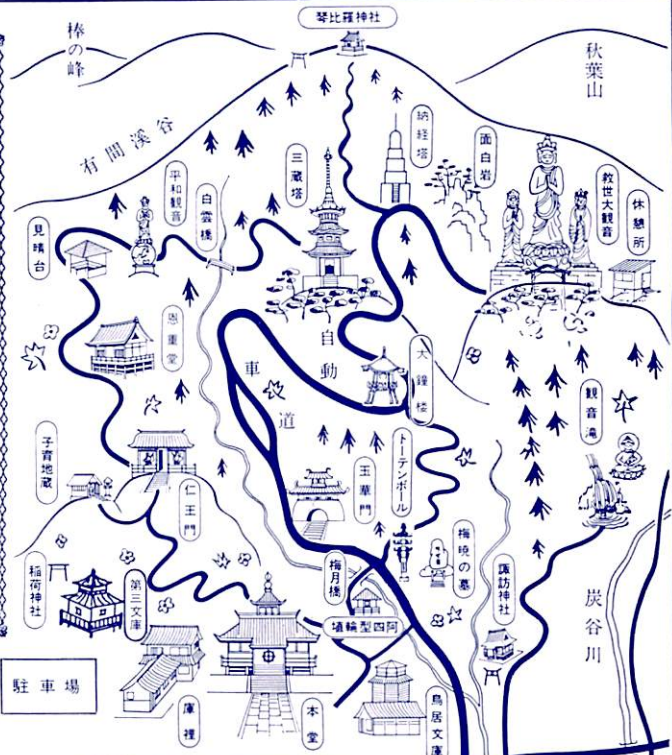
○四月十七日 春季例法要

大勢さまのお詣りをお待ち申し上げます。

とりひ 第五三号 発行日 昭和五十七年十一月十七日
発行人 埼玉県入間郡名栗村 鳥居観音 平沼 宏之
印刷所 浦和市仲町二一八―十五 武州印刷株式会社
発行所 鳥居観音 電話 ○四二九七―九一〇四一七

白雲山

鳥居観音
観世者センター案内図



春の行事

○新年元旦祈禱 1月1日 10時

○春彼岸法要 3月21日 10時

○つつじまつり 4月1日～5月31日

萌える新緑の中に、つつじが紅を織りなします。

○春季大法要 4月17日 10時半

○あじさいと藤の花 5月～6月

○常時供養、祈禱申し受けております。

ご先祖・水子供養

家内安全、商売繁昌、交通安全、入学祈願など

○お山参拝
文庫見学 常時9時～4時半